

みおしえ



増上寺中興の祖

観智国師 存念上人



齊藤悠真



2019年は観智国師の400回忌となります。

埼玉教区浄土宗青年会

<http://www.saijousei.com>

悲しきかな、悲しきかな、

いかがせん、いかがせん。

ここに予がごときはすでに

戒定慧三学の器に非ず。

(徹選択集)

《意味》 ああかなしい、本当にどうしたらよいだろうか。私のような者はもはや戒定慧という三種の修行ができる器ではない。

これは『徹選択集』にある、法然上人の御言葉です。この世でさとりを得る仏道修行（戒をまもり、心の安定を得て、さとりの智慧をおこすこと）に比叡山で励んでいた法然上人が生まれた時から既に煩惱を持っている己では、自分の力ではどうしてもさとることができないと、自覚し、悲しみとやり場のない心情を吐露した御言葉です。

前に向かっていく気持ちが、自分の力の限界に至って立ち止まらなければならないとき、力不足を感じながら何もすることができないでいる状態を、私たちは「かなしい」と表現します。

私たちは生きていく中で、様々な悲しいことや、辛いこと、苦しいことに直面します。身近な人の死、人間関係、社会の不条理、後悔や自己嫌悪などは誰にとっても望むことではありません。日々の暮らしを健やかな気持ちで過ごしていきたい、そう感じるのが自然です。病気もなく、人間関係や仕事、家庭もうまくいっている、そんな状態にある人にとって、仏教はあまり必要とされていないのかもしれませんが。しかし人間いつまでもそうはいかないもので、思いどおりにならないものです。人生には、自分がこうありたいと思い、歩んでいく中でうまくいかず、つまづく瞬間が必ずあります。

幼かった頃、祖母を亡くし「人は必ず死ぬ」ということを実感しました。まだ一緒にいたい。どうか阿弥陀さまあの世へ連れていかないでほしい。夜、暗い本堂の中、阿弥陀

陀さまを前に掌を合わせたのを今でも覚えています。いつも見ていた祖父や父が本堂で人を弔う姿から、お念仏をすれば祖母は助かるかもしれない、そう思った期待とは裏腹に、その日、祖母は息を引き取りました。「人が死ぬ」という事を前にして仏さまは無力だと悲嘆した当時、いま振り返るとお念仏は魔法の言葉などでは決してなく、祖母の死は、「いずれ誰しもが必ず死ぬ」という、もつとも根本的な事実を、そのとき阿弥陀さまから教えていただいたように感じます。

穏やかな春風が吹いていた四十九日。やり場のない悲しみの中、立ち止まってふと足元をみると、紫色の花をしたムラサキケマンが咲いていました。平坦な道路の端にも、厳しい上り坂の山道にも、どこにでも咲いている雑草です。普段なら気に留めることもなかったと思いますが、茎が太く日陰にひっそりと咲く、その雑草の存在に気がつきました。ムラサキケマンという名前の由来は、仏具のひとつ「華鬘(けまん)」という装飾具に似ていることからこの名になったとされています。ムラサキケマンの花

言葉は「あなたの助けになる」です。

身近な人の死を迎え、やり場のない悲しみの中で立ち尽くしても、御念仏を通じて、亡き人を身近に感じることがあります。「ただ南無阿弥陀仏と御念仏を称えれば、極楽浄土に往生でき、誰もが救われる」浄土宗の教えの原点には、冒頭で述べた、法然上人が「人間とは何か」を直視し、己の限界、人間の限界を悲しんだところにありました。立ち止まったとき、いつだって、あなたの助けになる存在があります。つらいときも悲しいときも、うれしいときもいつだって、阿弥陀さまは私たちに寄り添ってくださいます。仏教はいまを生きる私たちのためにあります。活の中心にお念仏とそのみおしえを据えて過ごしたいと思えます。私たち僧侶は、皆さまが健やかな気持ちで日々を送られることを願い、支え、寄り添う存在でありたいと思っております。

合掌

表紙の解説 存応上人（ぞんのうしようにん）

存応上人は、天文十三年（一五四四年）武蔵国多摩郡由木（現、八王子市上柚木、下柚木）の由木家に二男として生まれる。幼名は松千代。五歳の時に父由木利重が戦死し、その菩提を弔うため母の勧めにより十歳で新座時宗（現、浄土宗）法臺寺にて剃髪受戒し出家。そこで慈昌の名を頂く。十七歳の時、鎌倉浄土宗大長寺存貞上人の弟子となり、存応の名を頂きそこで浄土教を学ぶ。その後、師存貞上人を追って川越蓮馨寺に移る。そこでの勉強ぶりは「貧窮孤独の身にして、書籍を求むるにその価なし。夜学を志すも更に灯なし。古紙を拾いて書写し、蛍雪を集めて灯とす」という言葉が残っているように大変な努力を重ねた。師存貞上人没後、与野（現、さいたま市）真言宗長伝寺の離れに閑居し勉強に励む。上人の知識と能弁はたちまち知れ渡り、長伝寺の住持を任され浄土宗に改宗。その後、思い出深い鎌倉大長寺に戻り住持になる。さらに火災に遭った増上寺再興に尽力すべく増上寺第十二世となる。そこで徳川家康と出会い、増上寺が江戸の菩提寺となり急速に発展した。数年かけて本堂、山門、経蔵などの大伽藍を完成させ威容を天下にしるした。そして家康公の取り計らいで御陽成天皇より「普光観智国師」号を頂く。亡くなる元和六年（一六二〇年）七十六歳まで、浄土宗の発展、増上寺の興隆に尽力したことから増上寺の中興の祖とされ、江戸初期の三大高僧「天海、崇伝、観智国師」に列せられる。

解説執筆 長伝寺 大和田 教仁
合掌

存応上人の御詠歌

弥陀本願の御詠歌（第二十五霊場総本山知恩院の御詠歌）

観智国師存応作 松濤基曲

「草木も 枯れたる野辺に

ただひとり松のみ残る

弥陀の本願」

意味

冬の木枯らしの吹きすさぶ中、全ての草木が枯れてしまった野辺に、松だけが常盤の緑をきわだたせているように、全ての教えがすたれてしまっても、弥陀の本願の教えだけはいつまでも、私たちを護り導いてくださる。

（新纂浄土宗大辞典より）



発行 埼玉教区浄土宗青年会

会 長 吉水大順
広報編集局長 加藤健一

無断複写を禁止します